

「父の望みどおりに」

詩篇
エゼキエル書

第139篇1節～6節
第37章 1節～10節

説教 岡村 恒 牧師

主イエスは権威あるお方でした。例え話をして、今日ぶどう園に行きたくらいという父の願いに対して、『わかりました』と言って行かなかった兄、『いやです』と言いながら後になって心を変えて出かけた弟。主イエスのこの例え話の言葉には私たちが方向転換させる力があります。

過ぎ越しの祭りのためエルサレムには大勢の人が詰めかけていました。かつてエジプトの地で奴隷の家からユダヤ人を解放してくださった、あの出エジプトの物語。犠牲の小羊を殺して、その血を玄関の柱と鴨居に塗ってある家は、神の災いが過ぎ越して行きました。神が私を救い出し、神のものとして生かしてくださっている事を、この祭りの度に確認をして生きてきました。

主イエスはその祭りの只中で、神を冒した者として捉えられ、ローマに反逆をする者として訴えられ、十字架にかけられて殺されます。主イエスを捉えたのは権威でありました。権威によって裏打ちされたものは、そうでないものとは異なります。その違いを決定的にしているのは、保証しているのは誰かということです。

主イエスは権威を本当に理解することが難しい現実を指摘されました。主イエスには力の根源がどなたかがよくわかっていたのです。主イエスは12人の弟子たちを呼び寄せて、派遣をなさる時、汚れた霊を追い出し、あらゆる病気、煩いを癒す権威をお授けになりました。

主イエスがやがて復活の後、天に昇られたとき、弟子たちに宣言をされました。「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいの事を守るように教えよ。」(マタイによる福音書 第28章18-20節)主イエスの大宣教命令と言われる言葉です。権威という言葉は決して人を支配する力ではなく、私たちが神ならざるものから解放する力として登場します。

主イエスがお使いになった権威は、私たちが解放し、創り変える権威です。そしてその権威の根源は全知全能の神です。実は私たちが権威

に抵抗を覚えるのには理由があります。人間の持つ小さな権威が殆どの場合人を押さえつける権威だからです。地上の様々なものが後ろ盾になって権威を与え、その権威によって様々なものを実行し守っています。しかしそれらはいずれも小さな小さな権威であります。バプテスマのヨハネ、彼が主イエスを指差して『世の罪を取り除く神の子羊』そう叫んだのは、彼を遣わしたのは神だからです。

この権威が、発揮されたのは、あの十字架の上でした。本来なら私たちはやがて裁きの日、滅びの宣告を受ける者でした。しかしあの夜、小羊の血を塗ったあの家を神の裁きが過ぎ越して行ったように、十字架の上で肉を裂かれ血を流された私たちの過ぎ越しの小羊、主イエスを信じる者は終わりの日、裁かれることはない聖書にははっきりと書かれます。

私たちは自分の持つものを守るために権威を欲します。神の国の権威は、あなたの罪を赦し、解放し、生かすためだけに使われました。主イエスは、私たちが救われて、神の子として生きることが父の望みであると言うのです。

主イエスが十字架に架けられたとき昼間でありながら空が暗くなりました。神なき世界の闇が世界を覆い尽くしました。多くの人が今日、神なき闇の中で捨て置かれているのではないかと、そう思い始めています。しかし私たちが生きている世界は、主イエスが復活をし、終わりの日を用意している世界です。やがて一切が終わりを迎えるとき、主イエスが到来をして、この世界が本当に消えることのない光の中にあることを明らかにして見せてくださいます。

主イエスを信じ洗礼を受けた者は、神の国の権威を持っています。隣りに主イエスを証し、赦しを宣言することができる。これが、聖書が約束する信仰者の姿です。今日から心を変えていただいて、父の望み通りに神の国を生きる者として、歩み始めるなら、私たちがまた主イエスと同じように、弟子たちと同じように神の国のために用いられて生きようになります。今日のこの瞬間から私たちは皆、天の国の権威が人の罪を赦し、生かす力をその内に持って味わいながら生きるのです。

(記 説教要約奉仕者)